
野郎達の英雄譚

peixe

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野郎達の英雄譚

【Nコード】

N5699Y

【作者名】

peixe

【あらすじ】

MMO廃人のネカマと野郎と駄目人間たちが織り成す、ゲーム世界に旅立つちゃったよ的なお話。

本作はTS要素を含む予定です。

本作はグロ表現を含む予定です。

作者素人故に文章や表現に珍妙な部分が存在します。

設定が破綻する予感もします。

それでもいいという奇特な方のみお進み下さい。

第一話 ネットゲーの終わり

【重要】ディープファンタジーサービス終了のお知らせ XX/1
0/24 09:15

日頃より「ディープファンタジー」をご愛顧頂き、誠にありがとうございます。
でございます。

ディープファンタジーサービス終了のお知らせ

20XX年4月1日よりサービスを開始いたしましたディープファンタジーにおきまして、
20XX年12月31日を持ちましてサービスを終了させて頂く事になりました。

当サービスに関しまして、多数のお客様よりご意見、ご指摘など貴重なお言葉を頂き、
より満足いただけるゲーム開発・運営の維持、サービスの向上など、当社内部での協議、
検討を行ってまいりましたが、サービスの終了を決断をせざるを得ない状況となりました。

ディープファンタジーをご愛顧頂きました皆様には、サービス終了という結果になりました事
深く、深くお詫び申し上げます。

20XX年12月31日のサーバークローズまでの短い期間となりますが、

引き続きディープファンタジーをお楽しみ頂ければ幸いです。

サービス終了までのスケジュール

・20XX年10月24日(月)

サービス終了のお知らせ

・20XX年10月31日(月) 24:00

新規会員登録終了

利用権販売停止

・20XX年11月30日(木) 24:00

サーバー無料開放開始

お問い合わせサポート終了

・20XX年12月31日(土) 20:00～23:59

最終イベント・邪神封印

・20XX年12月31日(土) 24:00

ゲームサービス終了

サポートについて

・お問い合わせサポートは20XX年11月30日まで受け付けております。

20XX年11月30日24:00移行、お問い合わせ頂きました一切の内容に関して、ご返答出来なくなります。

今までディープファンタジーに関して様々なご意見、ご感想をお寄せいただきました多くのお客様に、運営チーム一同、厚く御礼申し上げます。

短い期間ですが、今後ともディープファンタジーを宜しく願います。

たします。

20XX年10月24日(月) ディープファンタジー開発・運営
チーム

12月31日、午後19時55分。僕はこの会社での最後の仕事をするためにパソコンに向かっていた。世間では大晦日だが、僕はまだ仕事である。

制御工学系の大学を出て、この会社に勤めて早4年。その間、僕はディープファンタジーの開発兼主任GMだった。

初めて会社行った時にいきなりGMをやれ！人手が足りん！といわれて初めて触ったのMMOがディープファンタジー。

ゲームは好きだったが、後輩に「ネットゲームだけはやらない方がいいですよ。ウチみたいになるんで」と僕より1年年上の後輩（あだ名がセンパイ）に散々脅されていたので、ネットゲームは触らないようにしていたのだ。

センパイは重度のMMOジャンキーで、相当のオタクで引き籠もりがちになり、留年したと言う。馬鹿だがいい人だ。何だかんだで研究の指導やらなにやら色々やっているうちに親友と言える間柄になったので研究室ではいつもつるんでいた。センパイがそれなりに好きだというMMOに興味が無かったわけではないので、面接の練習のつもりでこの会社を受けた。面接のつもりがGMになっていた。何を言っているか良くわからないが、僕も良くわからない。まさにポルナレフだ。

それから4年。長いようで短かった。僕は何が何やら判らないうちにこの会社に就職し、GMとして、開発者の1人（恐るべき事にこ

のゲーム、開発も人手不足だったらしい。)になっていた。

長いようで短い、4年の月日は、僕がディープファンタジーの世界が好きになるのには十分な時間だった。

世間ではそんなに好評では無かったようだ、割とシビアな世界観とバランスは玄人向けであつたので、ある程度「判つて」いる奴らしか残らなかった。社長も「判つてる奴らだけ残ればいい」というスタンスだったので、色々口論にもなつた。こだわりをもって作られた世界だつたのだ。そんな中でGMとしてイベントや何やらを企画して、成長していく世界を見るのがたまらなかつた。まさに神の視点だ。

でも、世間と言う奴は厳しいもので、集客力に乏しいディープファンタジーはカネを稼げないタイトルだった。次回作を早急に出さねば我が社は潰れる。そんな感じで僕ともう一人をサーバー管理者(兼次回作開発)として駆け足で開発を行っていたのだが、外注先がポシャつた。その穴埋めの為に社長やその他上の人は駆け回つたようだ、結局「夜逃げ」という最終手段をとらなければならなくなつたようだ。つまり、僕は職場を失うハメになつた、と言う奴だ。

実際に会社に行つて行かう仕事は全部済ませてある。差し押さえを免れたのは既に賃貸料金を支払つていたゲームサーバーだけ。開発用のワークステーションやPC類は夜逃げの翌日に差し押さえが入つた。私物のHDDに移してあつた開発ツールやその他は細かいデータ類は自分の手元に残つたが、12月31日の24時でレンタルサーバーとの契約も切れる。

「八木さん、イベント準備できましたー！プレイヤー皆集まってるヨー！」

センパイもお人よしだ。何も僕を追いかけて同じ会社に入ってこなくてもいいのに。

「センパイ、Pアカ（プライベートアカウントの意）の方で入ってるんですか。Gアカ（GMアカウントの意）でやってもいいですよ」

どちらにしてもこれはもう業務外といってもいいだろう。給料も貰えない上に、私物のノートPC2つで、コタツに入ってレンタルサーバーにログインしているこの状態ではGMというのもおこがましい。

「いやー、ウチも結構このゲームはプレイヤーとしてやりこみましたから、何だかんだで自分のキャラでやりたいんですよー」

コタツの向かい側のセンパイは笑いながら、イベントを楽しむつもりでいるようだ。まあ、それでもいいだろう。大晦日に無職二人でコタツ挟んでやることじゃないなあ、と苦笑しながら。GM八木太一としての最後の仕事を始めることにしよう、と。明日は正月だけど、ハロワって何時から開いてたつけど、取り止めも無い事を考えながら。

「じゃ、始めましょうか。ディープファンタジーのラストクエスト、邪神の封印を。」

そう、僕はまだGMだ。プレイヤー^{おきやくさま}を楽しませる必要がある。少なくとも今日の23:59までは。

「神じゃなくて邪神ツスけどねー」

「うるさい、プレイヤーはどうなってるんですか。」

こんな合いの手も日常茶飯事だった。この掛け合いもう出来なくなるのかと思うと、多少寂しい物がある。

「ログイン数は…あ、ウチら合わせて丁度108人です。108なら煩惱の数っスねー」

予想より多くも無く、少なくとも無く。なんだかんだでこの末期ゲームにもそれだけの愛好者がいた、という事か。

- これより、クエスト『邪神封印』を開始します。イベントに参加なさるユーザーの皆様は『絶望の迷宮』へお越しください。尚、このクエストは受諾制限はありません -

- また、これは運営チームからの最後の挑戦でもあります。お時間が許すならば皆様、どうかご参加ください -

ワールドチャット
お知らせを打ち込んで、時計を見る。20:00。ぴったりだ。
まさにパーフェクト！最近は全部マクロ化してたから多少心配だったけども、取り越し苦労だった。

「それじゃ、邪神役しつかり果たして来てくださいッス」
センプイはそういつて、自分の分身の操作に戻る。曰く、「最近のユーザーなんて我侭っすから、最後のイベントなんだから全員参加してもらっスよ」と言う事らしい。プレイヤー側として参加してくれるという事だそうだ。

遊びじゃねーんだMMOは！とか言うセンプイは、客離れを防ぐためにプライベートでキャラクターを作成して、色々やっていたらしい。本当にMMO好きなんだなあと僕は感心したものだ。

「ディープファンタジーは遊びじゃないんデスよ！」

僕にとっては最初から仕事だったけど。その一言で引き締まる気がした。そう、エンターテイメントを尽くしてこそ、GMだ。ゲームマスター

- また、これは運営チームからの最後の挑戦でもあります。お時間が許すならば皆様、どうかご参加ください - ラストクエスト

何だかんだでこの時が来たか、始まりがあれば終わりもある。

私はフレンドのヒゲダルマの「どうせ最後のイベントだ！派手にやろうぜ！」という言葉に乗せられて絶望の迷宮の前に立っていた。正しくは、チャカ。私じゃなくてチャカが絶望の迷宮の前に立っていた。

大学受験に失敗した私が、MMOに嵌って、さらにずるずると浪人を続けるハメになって、親に追い出されたのは決している思い出ではない。

幸いにもイラストが趣味で、それなりの腕前があった私は、同人活動やプロのアシをしながら、なんとか食いつないでいる時に、気分転換とか、それこそ生き甲斐になってた位大事だったのがディープファンタジーだったと言うのも事実だと思う。そのぐらい嵌ってた。

男の尻を見ながらゲームするなんて趣味じゃないとか言っ
て、大体の奴らがどのオーガだよ！と突っ込みを入れるような女キャラ
を作る中、私はもののすごい美少女キャラを作った。むしろ美少女
本当に間違いないくド直球ロリータを目指して体现したのがこの私、
チャカだ。

流れるようなプラチナブロンド、病的なまでに白い肌、瞳は常に
濡れたような光沢を放つ深紅。女性的な起伏には乏しいが、その瑞
々しく伸びる四肢に張り付く肉の柔らかさ等等。装備品の選定も、
ハードコアファンタジーという煽り文のディープファンタジー内
においても、所謂萌えと言うものを集め、組み合わせ、拘りという拘
りを持って『場違いなまでに萌える』という私の手による造形物に、
「このロリコンが」「厨二病型ド変態もここまで来ると芸術的」「
アゲ スーパーここだー！」「おまわりさんここです」等々
ギルメンにお褒めの言葉を貰った。

まさにロリ嗜好野郎の脳内妄想ここに至り、という非常にフェテ
イッシュな外見であり、4年間、正に常時鑑賞していても私のまた
ぐらはいきり立つ事が衰えない。私自身、常にネカマとしてロール
プレイしたが、これほどまでに執着したのもチャカだけだ。

正に俺の嫁である。

そんな私ことチャカの勇姿？を見る事も今日の24時まで。所持
品欄に今まで装備していた普段着を突っ込み、ダンジョン攻略用の
「一呪われた針の筵のローブ《ボンデージスツ》」や「ねじくれ
た血の使者」を装備して、準備万端。隣にいるヒゲダルマに話しか
ける

「今までに何度も周回してきた絶望の迷宮だけども、なんかそこま
で違うのかなー？そりゃイベントって言うからには何かあるんだろ
うけどさ」

ヒゲダルマはムツキムキの筋肉達磨の両手斧を使うファイターだ。無精髭がモサモサで、一見鬼のように見えるが目はひどくやさしい目をしている。結構デフォルトの顔から弄っていたので、聞いた所、「好きな人の顔を作ったんだよ、マジカッケーだろ？」と言う回答だった。私のセンスとは多少一線を隔している。ヤツはきつとハードなゲイに違いない。

最後の1ヶ月間の無料キャンペーンが始まって数日でPTチャットやギルドチャットは使い物にならなくなった。

ヒゲダルマ事態はかなりの古参だ。私は正式版組だけど、ヤツはからやっていたらしい。

ギルドをふらふら渡り歩いていたり、暇な時に街で見かけたり、私とヒゲダルマの間に接点が無いわけではなかったけど、会話するきっかけが無かったのだ。それがこの最後の1ヶ月で親友と呼べる程度まで会話するようになったのは、毎週のメンテすら消え去ってPTチャットやギルドチャットが死んでから。ぶっこわれて

全く皮肉な話で、PTやギルドという内緒話が出来るグループが無くなってからのほうが人と話す機会が増えた。確かに身内同士での会話は楽しい。楽しいが、新しい知人が増えなかったのも事実だ。MMOなんて人と人との交流が無いならひどく時代遅れのクソゲーだと思は思う。最後の1ヶ月の方が新しい友達フレンドが増えた。

「俺の見立てによると、今ここには1000人集まってるだろ？24時までの4時間イベントだ。普段1周2時間かかる絶望の迷宮で、移動時間が賞味1時間、戦闘時間が1時間：MOB量10倍ってところじゃないか？」

「そうだね、1000人かあ。結構過疎ゲーだったけど、居るもんだね……って10倍とか、さり気無しに無茶苦茶な事を言うねー」

1000人で挑むからMOB量10倍、でも、人数さえ居るなら十

分攻略可能なんだろう。その辺りのさじ加減に関しては、私はこの運営は信頼していた。厳しいけど、不可能じゃない。その絶妙ラインを見極める事は他ゲーの運営よりもよっぽど上手だった。

- 尚、今回のイベント中の『絶望の迷宮』内でのモンスター量は通常の約10倍になっています。皆様お気をつけ下さい。 -

- また、迷宮最下層に存在する『邪神』は皆様全員の力に匹敵する力を備えています。どうか打ち倒し、封印し、この世界をお救い下さい。 -

- それでは、皆様、御武運を -

おおおおおおおおおおお、と雑多なログが流れ、私たちは進軍する。予めPTを組んでおいてよかった。チャットは使えなくても、戦闘単位としてのPTはまだまだ有効。

「ヒゲさん、タイタンとナイトウとヤミカゼは？」

「あいつらはあそこ、ナイトウなんて前衛じゃないのに張り切ってるぜ」

「じゃ、最後の戦い、楽しましようか！」

先頭集団に追いつけ追い越せ、被弾をしてもいいように各種回復・弱体スキルで何を使うか、頭の片隅で考えつつ、おまつりに参加最前線組に合流した。

「うっはwwwおkkkkk」

オレは「地獄の炎」の詠唱モーションに入りながらチャットを打つ。一昔前に流行った内藤語はトレードマーク。まあ別にナイトじゃないし黄金の鉄の塊な訳でもない。でも簡易なキャラ付けとして

は割と絶大である。それなりに見知らぬ人からも話しかけられるし、正直困った時にはw(草)を生やしておけばいい。楽だ。

正直いい歳して何やってるんだろうなあって素に戻った時は思うが、この口調も4年も続けば意地にもなる。だからオレは内藤語でフロント語の使い手でナイトウなのだ。

「今日も絶対調みたいですねナイトウさん！」

モニター

視界を360度ぐるりと回して、見知ったキャラを見つけて、ああこいつもやっぱり参加したかと。妙な感慨を抱く。

「うはwww変態幼女wwwk t k r wwwwwww」

「だから」

「変態じゃ」

「ねえっつーの！」

いや、そこは否定できないだろ。少なくともこのゲームでそんなロリキャラ使いはお前だけだよ、と内心思う、この掛け合いも今日で終わりだ。

「食らえ必殺の減るファイアアアア！1！！」

無駄にハイテンションな台詞を打ち込みつつ、普段の10倍の量の「敵」に思う存分自分の最強スキルを叩き込む。4年、同じような事を繰り返していても今日は量が違う。刺激が一味、違う。

もう既に「見慣れた」エフェクト。だが、オブジェクトの設置の限界に挑むかの量のモンスターの群れと、エフェクトの量は膨大な熱量を発してグラフィックボードを苛む。グオオオオオンと普段より一回り激しい轟音はスピーカーから出たモンスターの悲鳴か、それとも自分のパソコンが上げる悲鳴か。

アドレナリン

そんなくだらない事でも脳汁がダバダバ出る。多分全部終わった後、一人恥ずかしい思いをするんだろうが、それでもいい。

「んんん破壊力ばつ牛うううん」

ンギモ、チイイ！！

ああうん、オレはこの世界がすげえ、好きだ。終わるのが勿体無い。

「ナイトウ、スマン。打ち漏らし3ぐらい行くわ」

重装甲、剣と盾をガッチリ構えて敵の群れを抑えていた戦士が「盾強打」の合間にチャットをぶち込む。Oh Shit!

「オイイ！？タアアアイタアアンーーー！？」

冷静にバックステップを踏みながら、バラバラに襲い掛かってくるAIの化け物を「凍て付く吐息」で巻き込む。与ダメはそれほどでもないが、相手の行動速度を極めて鈍化する、射程以外はそれなりに優秀なスキルだ。「凍て付く吐息」で迎撃、間合いを取った後に6本腕の化け物達を襲ったのは「腐れ落ちる水」だった。

ドロリとした粘性のある液体に包まれ、見る見るうちに腐れ落ちるモンスターの肉と骨。そこに残るのは汚らしい泥水のみ。

「最後までキッチリしめてよね！」

フロローはありがたいが、うつせえ腐れ少女。中の人はどうだか知らんが。

「汚いなさすが死霊使い汚い」

4年も似たような事をしていたが、今日は流石に「別格」だ。

22:43 土曜日 20XX/12/31。GMキャラクターで透明化しつつプレイヤー動向を観察していた僕は、時間を確認して多少悩む。

「うーん……」

先頭集団の進み具合から邪神の間にたどり着くまでに後20分ほ

どかかる、と大体予測してモニターから目を離し、ぬるくなったコーヒーを飲む。

大体予定してた時間から凡そ30分ほど遅れている。このままだと僕を倒して大団円、その後のロスタイムでトークタイム、という当初のシナリオから外れてしまう。どうしよう。

「八木さん、邪神倒してゲームが終わりって最高にカッコイイじゃないっすか！それで行きましようよ！」

センパイが僕の顔を見て割り込んだ。いつの間にか独り言になってた。ああ、その終わり方も確かに「カッコイイ」

「そうだなあ。それもいいかもしれない、か」

予定通りに事が運ばないのもいつも通りの話で、いつもそうだった話で。メンテを完全にサボって居た鯖が（一部機能がマヒしている以外）問題なく動いているのも正直予定外だった訳で。ギルドチャットやパーティチャットが死んで居るおかげかそれとも、108人しかログインしてないせいか、普段より軽い位だ。

「じゃ、センパイ。そのままプレイヤー盛り上げながらお願いします。僕は邪神キャラの方に入るんで」

「はい。邪神っプリをしっかりと発揮してくださいッス」

邪神っプリってなんだ。一応台本は書いて来たけど、作家という訳じゃないから拙いものだ。ただ、この拙いシナリオでも喜んでプレイしてくれたお客様の皆様には幾ら感謝しても足りない。

そして僕は『邪神』になる。

「回復たのんます！マスター！」

「そのまま。回復ディレイが終わる5秒後まで待て。その後復帰、
「足払い」を入れる。その後力ウンターに入る。あと少しだ。行くぞ！」

全身を豪奢に輝く伝説級の装備に身に包み、その装備に負けぬほどの尊大な雰囲気醸し出すその修道者は、最前線の真っ只中にも埋没しなかった。

その装備を良く見ると、ただの伝説級装備と言う訳ではない。限界中の限界まで鍛え上げられ、理論上最高の性能を誇っている。どれだけの時間を注いだのか。注いでもここまで揃えられるのは一握りの幸運に愛された者だけだろう。そう、自分のような。

「マスター、もうすぐ邪神の間です。」

「ああそうだ、10倍と言ってもたいした事無かったな。」

2年前BOTerとして晒された。四六時中狂ったようにレベリングをしていたからだ。俺は悔しくてギルドを作った。1年掛けて誤解を解いた。誤解を解いた後RMterとして晒された。ギルドメンバーと狂ったように出した装備をRMTの結果で揃えた、らしい。世間と言う物はひどく無責任で、邪悪だ。誤解は解けなかった。ゲームに飽きたのか、それとも自分と一緒に居る事に飽きたのか。200人居たギルドメンバーはどんどん減った。

ギルドに残って、ログインし続けたのは40人。よく残った。本当に。本当に精鋭だ。

今のディープファンタジーでは、アクティブが40人も居るギルド、というのはそれだけでも大手だ。なんだか2年掛けてようやくこのゲームでトップに躍り出た気分になった。最強だった。

そう一息ついた時に、このゲームが終わるという告知が出た。マジ泣きした後、怒りがこみ上げた。誰にぶつけれる怒りでもない事は百も承知している。

何でこのゲームが終わらなきゃならないんだ。こんなに楽しいのに。自分のこの怒りがどこに伝わる訳でもないのが更に腹立たしい。単なる大学生であるこの身が口惜しい。もっと力と金があれば。もし10年産まれてくるのが早く、社会的に成功していたら。もし、と仮定しまくった。無意味だった。怒りは更に募るばかりだった。

そして、今、この場に立っている。いつものギルドハンティングの延長のつもりで立っている。もしかしたら、普段どおりにしていたら続くのではないかと妄想しながら。ギルドマスターの、仕切り屋としての役割を果たしている。

「そろそろボスカ…行くぞ！」

「神の祝福」「守護者」「盾よ」を発動させつつ、ギルド全体だけではなく、部外者^{P.T外}の面子のHPも計算する。100人単位のHPを管理するのもまだ戦争がコンテンツとして成り立っていた時以来だ。

懐かしさだけじゃない、まだ見ぬ「邪神」を狩る為に。まだ見ぬ強者を狩る為に。自分の血が沸き立っていくのが判った。

- 騒がしいな。我が愛し子達よ… -

画面をこれでもかと揺らしながら、先陣を切った自分達のギルドの前に立ちふさがったのは、正に「邪神」だ。

邪神は禍々しくも神々しい巨大な体躯、ぬめる様な光沢を放つ肌、

6対の腕と2対の脚を持ち、無数の武器をがしやりがしやりと揺らしていかにもな雰囲気醸し出していた。これがせめて1年前に導入されていれば…ああ糞ッ！

・ククク…フハ、ハハハハ。そういうことか。我を封じる心算か…
・その過ちごと存分に愛してやろう…ゆくぞ…

「邪神」のそのワールドチャットを皮切りに、自分・ウッドベル率いる、ギルド「レゾナンスペイン」は総力を挙げて神殺しの「作業」を開始した。

今年のイヴは散々だった。金土日、リア充するつもりが、一人さびしくシングルベルとか意味不明な道化を演じたのは俺だ。

1年前の黒歴史のネトゲ充から脱却してようやく彼女が出来た。本気で彼女に尽した。なんだか判らないが別れ話を切り出された。「えっ」とか素で言ったのは久しぶりだった。

「引退するわ、俺、リア充になるからよ」と言って辞めたディープファンタジーが、終わるといふ話をチャカからスカイプで聞いたのは二ヶ月前だ。熱中してた時は仕事から帰る、ログインする、ゲームする、寝る。その繰り返しだった頃の仲間だ。アイツまだやってたのか。「気が向いたらログインするよ」と適当な生返事を返したが、その時はこんなことになるとは思わなかったのだ。

24日の23:59。久しぶりに起動したディープファンタジーのアップデートが終わり、ログインして、ギルドメンバーリストを

見る。生存者は4人。俺ことタイタン、変態、逆毛、ネクラの4人がいた。「こんばんは」とギルドチャットで何度打っても返事が無い。あー、俺お呼びでない？と、更に陰鬱な気分になった時だった。

「久しぶり、元気してた？」

「おひさwwwおkwww」

「ちっす」

オープンチャット
白チャットの発言と、懐かしい奴らのアバターが走り寄ってくるのが見えたのだ。なんだか涙が出て止まらなかった。

「リア汁の癖になまいきにも24日にログインするとかwwwありえねwww」

「あ、もうギル茶死んで使えないから、オープンでお願いね。」

「所詮は同類」

こいつらひでえよ。俺失恋中だよ。何考えてるんだ糞が。お前らも同類じゃねえか。色々文句もつけなくなった、だけど、涙で滲む俺がとつさに打てたチャットは一つだけだった。

「ただいま」

とだけしか打てなかった。

復帰した俺は、49だったLVを50に上げようと決意した。3日に終わるディープファンタジーで心残りだった事といえばこの程度だ。仕事、ログイン、寝る、仕事、ログイン、寝る。28日の仕事収めの後の飲み会も断った。後はログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン。どこのペットボトラーなの、死ぬの？とチャカに心配されたが、それもたいした事じゃない。最優

先事項は50LVになって最後のイベントに参加して、心置きなく、正に満足して辞める為だ。おかげで31日の夕方には50達成、装備品も奴らに負けず劣らずの壮観な物になった。1年のブランクはゲーム内部の知識に虫食い穴を開けまくったが、データだけなら結構いけてる状態だ。

P i P i P i P i P i ! P i P i P i P i P i !

クエスト途中からメールが何通か届いていたが、俺は邪神封印のラストバトルの最中に携帯を取って見る気にはならなかった。煩いさつきから何通届いてるんだ？まあ後で見ればいいか、と放置をしていたのだが、流石にうつとおしくなった。

携帯を見て、冷や汗がびっしりと出た。

1 2 / 3 1 みわ

お願い

1 2 / 3 1 みわ

やりなおしたいの

1 2 / 3 1 みわ

届いてない？

1 2 / 3 1 みわ

ごめんなさい、お願いゆるして

1 2 / 3 1 みわ

ごめんなさい

1 2 / 3 1 みわ

返事してください

1 2 / 3 1 みわ

やりなおしたいの

「ずらりと並んだ『彼女』からのメール。どうしてだ！？振ったの
お前じゃないか！？どうしてだ？！一体どういうことだよ…。おい、
誰か答えてくれよ。」

思考がフリーズする。震える手でメールを開こうとして、マウスにおきっぱなしの右手が無意識にダブルクリックをした時。

俺の意識は暗転した。

「その過ちごと存分に愛してやろう……ゆくぞ……」

僕はすかさず「王者の咆哮」「呪い：邪神」「猛毒の瘴気」を発動、先制パンチを与えてヒーラーの出番を作る。同時に邪神としての一步を踏み出す。ズギヤリツ、ズギヤリツと金属質な異音を立てながら、「王者の咆哮」の開放タイミングを計る。

愛し子達が僕から立ち上るオーラに気圧されたように間合いを取る。有効範囲に居るプレイヤーは44人、今だ。

GURUOOOOO!

統制の取れたギルドの一団は、重装甲の戦士を盾役にするつもり

か、彼一人を残し一斉に下がる。ギリギリ範囲を掠めるように撃つたせいで、思った数のプレイヤーを巻き込むことは出来なかった。

「ちょｗｗｗｗｗｗｗｗ吹き飛ばしｗｗｗｗｗｗしかも超ダメージｗｗ」

「ちょ、何で一氣に下がるの?!」

「咆哮範囲は50m、魔法使いでも即死は無い。立て直したら行くぞ」

「メディック!メディック!」

「ガードは可能だぞ!いける!」

皆が協力して遊んでくれている。本当に嬉しい。

「連続振り下ろし」を盾役の戦士に叩き付け、毒のオーラで背後を取ろうとした暗殺者を絡めとり、後ろで回復に専念している修道者らを呪い、骨の戦士を絶え間なく送り込んでくる死霊使いに「地獄の炎」をたたきつける。

整列し、弓を装備した戦士達の一斉射撃が僕の体^{邪神}に突き刺さり、よろめきモーションを発生させる。

一瞬の隙を突いて、20人近くの魔法使いらが雪崩の様に投げかける魔法の一つが抵抗^{レジスト}を突破した。

10秒間完全に移動を拘束する、「足よ萎えろ」だ。

丁度「突進」を使おうとした直後なので、僕の攻撃はからぶる。足が止まった邪神に、長時間の詠唱モーションがネックの「死竜の火炎」が浴びせかけられる。骨で出来た巨大な竜が召還され、そのブレスが僕を^{邪神}焼く。ダメージ。状態異常・燃焼が付加される。

斧を構えた戦士が果敢に「重撃」を発動して6本ある右腕に攻撃をかけ、グシャリとへし折り、攻撃力が一時的に50%ほど減少す

る。暗殺者が背後から「捨て身の一撃」を加える。「死に至る毒」も追加で発動し、DOTダメージが追加された。側面からは両手持ちの大剣を装備した戦士が「唐竹割」を使い、脳天から一気に叩き切る。必殺の大技で、かなりのHPがこそぎ取られる。

「流石に数が多いとレジスト抜かれてあっさり気味かなあ・・・もうちょっと硬くても良かったかな？」

「八木さん、流石にカタ過ぎっす。結構ギリギリですよプレイヤー側も・・・っと」

僕の左腕がそれぞれ異なる6人の対象を選択し、暴風雨のような連続攻撃をかける。ガードを解いた正面の盾戦士を吹き飛ばし、「重撃」を叩き込んできた斧戦士に致命打を与えたのはいいが、残りの攻撃はタイミングを見計らった「守護者」により軽減され、「盾よ」によって弾かれ、通った攻撃も「癒しの光」「慈悲の輪」により即時に回復をされる。凄い。まるで通信パケットを読んで行動されているかのような回復だ。

「アッー！」

「あー、やっぱりアレセンパイでしたか…。」

邪神のHPは徐々に磨り減り、23:59 予定調和の時刻を演出すべく行動を開始する。今までにまして苛烈な攻撃スキルと邪神僕の高い攻撃力は最高LVの勇者たちを戦闘不能に何度も追い込んだが、その度に適切な蘇生スキルによって何度でも立ち上がってくる。そろそろ頃合だ。大技で全員のHPを削って演出しようじゃないか。

- 何故だ、何故死を恐れず立ち向かってくる！ -

6 対の両腕に持つ武器を大地に叩き付け、「怒れる大地」を発動させる。大地を揺るがすようなエフェクトと轟音。残HPはもうドット単位だ。23:59、後一撃！入れてくれ！

「アッー！」

「センパイ…また逝きましたか…」

「怒れる大地」によって減少したHPを自己治癒スキルの「血を肉に」で回復する。

死霊使い、という職はデバッファー兼ヒーラー兼遠距離火力職、という変則職。それだけを聞いていると万能のバランスブレイカーに聞こえるけども、死霊使いのスキルには厄介な使用制限として、manaポイントMPと同時にHPも消耗するという縛りがある。

そのHP消耗も単純なHPの消耗ではなく、ダメージ直後のHPの減少でも代用できるという一癖ある使い勝手。

「後ちよつとだーねえ」

「美味なる果肉」を発動させながら、邪神の攻撃で吹き飛ばされ、HPを大量に削られた盾戦士タイタンに接触する。接触した味方の状態異常を回復し、更にHPを回復させ続ける、だけど、回復させている最中は自分のHPが減り続けるという使い勝手が悪いスキル。だけど、他のスキルで遠距離回復となると、一定時間の持続回復HOTの後に再び持続ダメージを受ける状態異常を付加する「異常再生」や近くに死体が無いと使えない「死者の泉」等、今の状態じゃ使えないものしかなかった。

「タイタン、ちょ、反応ないし！ちよつと！」

減少したHPを回復しきつても反応が無い。早く「邪神」に攻撃入れてくれないと私が攻撃対象になる恐れもあった。焦り。時間を確認すると23:59。えっ、と思って「邪神」を見ると残HPはほんのわずか。目の前に迫る邪神。

「ちょおおおおお？！」

最後のクエストで失敗とかちよつとこれは無いでしょ！タイタンの阿呆！と私は脳内で叫びつつ周りを見渡す。
モニターを回転させる

180度。丁度真後ろを向いた時、唐突にブン、ブンと、今までフルスキルの手馴れた戦い方とは異なる、全くの素人じみた、まるでマウスをダブルクリックしたかのような通常攻撃の音が響く。

360度真正面を向いた時、それはやっぱり、タイタンが二回通常攻撃を振った音だった事を理解する。それが、邪神に命中したのを確認した時。

私の意識は暗転した。

23:59:59	土曜日	20XX/12/31	24:00
0:00	土曜日	20XX/12/31	

その剣は僕の^{邪神}体を十字に引き裂いた。

HPを示すバーは全くの0となった。

邪神^僕は封印される。

直後、停電が起きたようだ。安い賃貸マンションの、日当たりがあまりよくない自室。夜は明かりをつけないと本当に何も見えないぐらい真っ暗になるから困った物だ。

UPSが上手く働いていないのか、モニターの明かりもPCのディスプレイも全く見えない。安物を買ったのが悪かったか、と後悔をして、電源が切れたコタツから出ながら、センパイに声をかける。

「センパイ、ちょっとブレーカー上げてきます」

つもりだった。

あれ、

声が。

でない。

体が。

動かない。

おかしいな。なんだか、すごく、からだか、いたい。ねむい。つらい。くるし……。い。

第二話 目覚めたら英雄

寝覚めは最悪であつた。

寝落ちした時の、脳みそだけ休まつた時よりもひどい、無理な体勢で寝た時の全身の痛み。まるで岩の上で寝たかのような感覚。薄暗い部屋。新年だというのにこの惨状は本当に駄目過ぎる。昨晩は何だっけ。ディープファンタジーの最終日イベントに参加して、ボ^邪スを倒して？倒した？その後どうしたんだっけ。いつの間に寝たんだっけ。

ぼんやりと上半身を起こし、周りを見渡す。見慣れない部屋、どころか、見慣れない空間であつた。見慣れた空間でもあつた。混乱する。

私はまだ夢を見ているのかなあ、最近あんまり寝てなかったからねえアハハ。どうして巨大な人間の顔を持った、6対の腕と2対の足を持った化け物の死体が私の目の前に存在しているのか。

頭が重い。最近短髪にしたばかりのはずの私の頭から白い毛が大量に垂れ下っている。邪魔だ、と思って頭を振って振り落とそうとする。ぶるんぶるんと頭の動きに追従するように動く毛。ずいぶんとしつこい邪魔者だ。

私の周りで倒れていた人間達がうめき声を上げながら、だんだんと起き上がってくる。何この人たち超ビッグメンなんですけど。

「おい、これどうなってるんだよお！？」

ヒステリックな男の叫び声が響き渡った。その大声でようやく脳みそが完全に覚醒し、状況を把握する。

「何、これ」

私の声は、普通の野太い、私の地声ではなく。常々妄想していたチャカの声と全く同一な、綺麗なソプラノヴォイスであった。

手を見る。見慣れた私の、右手中指第一関節にガツチリと刻まれたペンだこと、右手首付け根に刻まれた分厚いマウスだことは無縁な小さな手。病的にまで真っ白で、滑らかな肌を持つ小さな手が見えた。

頭を掻き^{ブラチナフロント}。乱暴に扱ったせいか、数本の毛が抜ける。指に絡まる毛は、白金の髪の毛だった。

体を見る。締め付けるかのように鎖と針をあしらった、豪華なノースリーブのローブを身に着けた、チャカの体。

モニターでずっと眺めていた姿が、そこにあった。

もしこれが夢でないなら、悪夢の始まりなんだと思う。

私は悲鳴を上げた。

「え、あああああああああああああああああああ！
？」

酷く透き通った悲鳴が響き渡り、脳にうつすらとかかっていた霞のようなものが取り払われた。

全身を苛む打撲痛と、どこで作ったか分からない無数の切り傷と擦過傷。一切を無視してオレは飛び上がった。―自宅警備業を営んでいる《NEETな》オレだが、かつては警備員として勤務していた事がある。施設警備業務検定2級、数少ないオレの持っている資格だ。警備員時代を思い出し、最近不精で走ると息切れをする体に

鞭を打って悲鳴の発生源に駆け寄った。異様に体が軽い。いつの間
にオレはゾロゾロした服を着ていたのだろうか。知らん。カチャカ
チャと腰のバッグから瓶の音がする。知らん。

こんもりと山の様な何かの陰にその天使はへたりこんでいた。

天使の足元には倒れた若い金髪の鎧武者が居た。ずいぶんガタイ
がいい兄ちゃんだなあ、と思う。まるで天使と勇者じゃねーか。ず
いぶんなコスプレ野郎だが、リア充か？いやそうじゃねーよ。１１
０番？１１９番？とりあえず声をかけねば。

「あ、あの、だ、大丈夫ですッか。」

結構長い間他人としゃべってないせいで、どもる。思わず恥ずか
しくなつて横を向く。

横を向くべきじゃなかった。

そこには、頭蓋を叩き割られて、デロリとした、中からハミ出て
はいけないものが出ている巨大な、１ｍほどもある人の顔が存在し
ていた。

目玉が半ば飛び出し、舌がだらしなく開かれた口からによりりと
垂れ、鋭く伸びて尖った犬歯は片方のみ。真っ赤な血がぼたぼたと
垂れ落ちるその様を見たとき、俺は、情けなくも。

「ギヤアアアアアアアア！」

情けなくも、オレは誰よりも大きな悲鳴を上げた。

他人がパニックになっていると冷静になれる、という話がある。
一種の現実逃避なのだろうか？詳しくは知らない。だけど、私が悲鳴をあげた後に、大丈夫ですか、と走りよって来た、怪我だらけの大男が更にものすごい悲鳴をあげ、その大男の視線の先を見て私も更に悲鳴をあげて、二人とも更なるパニックに陥ったので、それは万人に当てはまる話じゃないと思う。

あんまりな惨状の化け物の死体の視覚的インパクトの後に襲ってきたのは、物凄い血の匂い。焼け焦げたたんぱく質の匂いと、ドブ川の腐ったような匂い。ツウンと来る尖った酸の匂いや、鶏を解剖したときの、腸を間違って破った時の匂い。それらがミックスされた物凄い悪臭だった。

「うぶつ、お、げええええ」

喉元にせり上がってきた胃液を抑えることが出来ずにビシャビシャと吐く。胃液しか出なかった。出なかったが胃液が無くなるまで吐いた。横の大男もゲロゲロと吐いていた。

吐くだけ吐いたら落ち着いた。横の大男はまだ吐いていた。

「あの、大丈夫ですか？」

そもそもこの台詞は私が言わなきゃいけないはずの台詞で、それを言わなければいけない程度にこの大男は怪我をしている。背中をさすりながら尋ねた。物凄い切傷と擦り傷が全身にあり、見た目にも痛そう、確実に痛いであろう。

「あ、う、あ、うん、大丈夫、お嬢ちゃんこそ大丈夫かい。二ホンゴハナセマス力？」

目の前の大男もまるで日本人には見えないが、日本語をしゃべれるなら意思疎通に問題ないだろう。多少どもっているのでハーフか何かだろう、と無理やり思うことにした。

「はい、大丈夫です、多分なんともありません。大丈夫です。」

なんともないわけがない。何でこんな格好をして、こんな状況に陥っているのか誰か説明してほしい。でも目の前に怪我人が居て、気遣ってくれているのだ、この際多少のことは飲み込むことにしようと思う。大丈夫、多分夢だ。悪夢かもしれないけど。それでもそれなりにまともな対応を取っておかないと。万が一の為に。いや、万が一と言ったが、嫌な予感しかない。物凄い悪夢の予感しかない。

「あの、すみません、本当に済みません。あなたのお名前は、何ですか？」

墓穴をほらずんば墓地を得ず、という名言は無いけど、その心境。

オレの人生に春が来たかも知れにゃ。目の前の女の子はゲロまみれだが極めて天使だ。いや、オレもかなりゲロまみれだけど、女つケのない人生、大学で話しかけたら汚物呼ばわり、ストーカー呼ばわり。社会に出たら男まみれの職場しか経験したことないオレですが、ここで一発女の子の友達を作ってリア充にステッポうpするしかない。いや、ここマジでどこか判らないけども。なんか体中怪我まみれだけど。ブロント様もこういつていたではないか。お前それでいいのか？と。いや良くない。どちらかというと大反対。ここで

チャンス物を物にしないとオレの人生がブラックカラーなのは確定的に明らか。

「伊藤史郎！30歳！前職では警備員をしていました！体の丈夫さには自信があります！」

面接の時の経験を生かしてハッキリと、にこやかに。出来る限りのスマイルを維持して、こうだっ！問題ない！面接の時の為だけに鍛えた自己紹介だ！

「あ、いえ、そうじゃなくて。」

ものすごくかわいい
天使のお譲ちゃんに一発で駄目出しされた。しにたい。

「あの、私の頭がおかしいと思うかも知れませんが、聞いてください」

不安な顔をしているこの子は、一体何を言い出すのだろう。いや、頭がおかしいのはオレのほうであることは間違いない。オレは場違いでいきなり面接バージョンの自己紹介をし始める、とか極まった変人じゃないか。

「もしかして、ナイトウさん…じゃないですか？あの、マジックナイトウさんじゃないですか？」

この天使いきなり何を言い出すのか。オレのディープファンタジーのプレイヤーネームをいきなり言い出すとか何者だ。

いや、もしかして、ちよつとまでよ。オレ、確か、そういえば、何か大切な事を忘れてるんじゃないだろうか。確か、その、うん、いや、認めたくは無い。ないが、こう、あれだ。アレだよ。確か日付けが変わるまでオレはPCの前でディープファンタジーしてた訳で。ギルメンのタイタンが邪神にLAを入れた所までは記憶してたてをもったせんしいる。その横にチャカへんたいようじょが居たのも覚えている。その時のオレのHPは

それなりに減っていた。それなりだが回復魔法が必要な程度じゃない。つまり…もしかして、その。いや、30にもなつてこんな妄想を口にするのははばかられる。非常識過ぎる。いや、しかし。

よく見たら、あの時の装備と状況と、一致している。モニターの中よりも圧倒的な存在モンスター感を放っていたけれども。

「もっ、もしかして、君、チャカ？」

チャカは今にも泣きそうな顔をして、頷いた。オレはまたもつた。しにたい。

目が覚めたらそこは戦場であつた。

「うう…イテエよ…」

「痛いよ…おかーさん…」

「…っぐう」

目の前に何人も倒れていたのは、多種多様の呻き声をあげて全身で苦痛を表現する、煌びやかな鎧をまとった戦士達。

自分も体に多少の痛みを抱えていた、小指を箆筭に打ちつけたような痛みがそこかしこから感じる。

周りを改めて見渡す。邪悪な気配漂うドーム状の大広間。明かりが少なく、薄ら暗い。周囲の松明のような物で照らされる足元は岩盤上の何かで出来ており、ヌルつとした質感を保っている。

数瞬、茫然自失となる。立ちくらみそうになるのを堪え、自分の

姿を確認する。着ていた物は毎日見ていた、金色の豪華な刺繍を悪趣味なまでに入れ、中に鎖帷子を仕込んだ修道服。腰には聖櫃な輝きを湛え、邪悪を打ち払う神聖な気配を漂わす戦棍^{メイイス}。背中に背負った丸盾も美術品かと思われるような彫刻が施されていることだろう。

唐突に気がつく。これは、自分が望んだ世界なのだと。

何を為すべきか？当然だ、決まっている。傷ついたものには癒しを。それが修道者だ。

自分なら、出来る。全能感が体を巡る。力が漲っている。

「『癒しの光』よ…癒せ…！」

このゲームを始めてから、それこそ数えるのが馬鹿らしくなるほど使用した修道者の基本中の基本スキル。使い方は体が覚えている。そう、たとえキーボードが無くても。マウスが無くても。そう。こんな風に。

目の前に転がっていたギルドメンバーの戦士を目標とする。

両足が妙な方向に捻じ曲がり、骨が露出していた。恐らくは「怒れる大地」の回避に失敗し、回復の為に後退していたのだろう。失血の為か顔を蒼白にし、息も絶え絶えだ。右手に集まった光が、戦士を包みこむと、飛び出た骨は元の形に戻り、捻じ曲がっていた足が見る間に整復される。蒼白だった顔色に血色が戻り、呼吸も安定を取りもどす。

耐え難い痛みが見る間に和らぎ、意味のある言葉を発する余裕すら出る。

高速逆回しをした動画を見ているような、非現実的で神秘的な光景。

「え。マ、マスター…一体？」

一命を取り留めた戦士が、まるで神に出会ったような、そんな惚けた顔をしていた。そうか、自分の顔は『ベルウッド』で通じる顔なのか。

「回復薬は持っているか。」
POT

「えっ」

「回復薬だ。腰のポーチに入っているだろう。」

半分以上の確信と共に、癒された戦士の顔を覗き込み、力強く断言する。

「あ、はいっ！」

急いで正座して、腰のポーチをまさぐっている副官を後に残し、次の対象へと移動する。

「見つけたらギルドの負傷者に飲ませるんだ。急げ。自分は重篤者を癒す。」

「はいっ！」

「た、多分、怪我とかは無いから。頭打ってたりとか、な、内臓とかやってたら判んねーけど。」

「うん、そう…だよな？大丈夫だよな？」

一人暮らしの俺の部屋に、誰か侵入したのだろうか。2人組みの聞き覚えの無い声がある。

「おいイ、た、タイタン、め、目覚ませー」

「タイタン、タイタン、起きて！起きて！」

ぺちぺち、と頬を叩かれる。ああ糞、誰だよ。泥棒か？鍵閉めてたはずだよな…と思考が多少回る。思い出す。みわちゃん！携帯！

「みわちゃんッ！」

「うごおっ?!」「ぎゃっ?!」

勢い良く飛び起きた俺の目に入ってきたのは、珍妙な服を着込んだ凸凹の2人組みだった。一体何だこいつ等。そんな事よりも携帯が！携帯が！

左手に持っていたはずの携帯が、何故か馬鹿でかい盾に変わっていた。

何故俺は自分の部屋に居ない？何故俺は盾を持っている。まさか誘拐？二十歳を超えたい男を誘拐してなんになる。しかも盾を持たせる意味はどこにある？新手的コスプレ誘拐団？さらって来た相手をコスプレさせて撮影して、それをネタにゆすり続ける？そんな馬鹿な事は誰もやらないだろう。どこに需要があるというのか。睡眠不足の脳は訳のわからない思考を加速させ、一通り暴走した後に、とりあえずの結論を下す。まずは携帯だ。

「あのー…、すみませんが、俺の携帯知りませんか？」

とりあえず手近に居る二人組みに尋ねる事にした。跳ね起きた時に二人組を弾き飛ばしてしまったのか、男は顔を抑えてのたうちまわり、少女は尻餅をついていた。

『知るかヴオケエ!!』

片方は鼻血を押さえながら、もう一方は尻餅をつきながらの違いはあるが、同じ台詞で俺に怒鳴りかかったのだ。

レンナンスベイン

自分のギルドメンバーを探し、癒し、指示を与える。恐らくここは自分の思っている通りの場所だろう。確証を得る為に更に動く。全身に力が漲るような感覚は続いている。『神の祝福』の効果は30分。最後にかけたのは23:33分時点。残り時間は3分、逆算して72分。まだ時間的余裕はある。ギルドメンバーは残り数名。深刻な負傷を負っている者ももう居ないはずだ。

「おい、これどうなってるんだよお!？」

「とりあえず落ち着け! いいから! な?」

パニックに陥った魔法使いと大剣を持った戦士が言い争っている。戦士はなだめようとしているようだ。どちらも自分のギルドメンバーに相違ない。鉄拳制裁を加える事にする。

魔法使いを殴り倒す。ゴリツと骨に響く音を感じた後、返す拳で大剣使いの顎を捉える裏拳を放ち、脳を揺さぶる。片膝をつく大剣使い。

「おま、一体誰だよ! いきなり何しやがる!」

殴りつけた直後に、「慈悲の輪」を発動。自分が拳で与えた程度の負傷にはもったいない

が、こうでもしないと落ち着かないだろう。一種のショック療法だ。神秘的な、重力に逆らうほどの白い円状の光が大地から放出される中、自分がこうありたいと願う姿で断言する。

「判らんか、自分だ。ベルウッドだ。」

「何これ?」「え、あ、マスター?」

自分の予感、いや、もはや確信といってもいい。それに従い言葉を選ぶ。正しかった場合は現状、自分たちは物凄く危険な状況におかれている。短期間的にも。長期間的にも。

「いいか、良く聞け。混乱しているかも知れんが、お前らはサブマスと合流してここに居る全員を集めるんだ。いいな？」

「あ、え、お、おう、判った。」

「お、オッケー。」

「行け、出来る限り急ぐんだ。話を聞かん奴らは無視してもいい。自分はギルド外の負傷者の救護に回る。異常が何か少しでもあればすぐに報告しろ、いいな？」

頷き、慌てて走り出した魔法使いと戦士を見送った後、全身に漲る全能感が抜け去る。この間、目覚めてから約70分。

予感が確信に変わった時、少女の悲鳴が聞こえた。

心配していたのにヘッドバットを食らうとか酷い話だと思う。目の前の事で手一杯なのは私も同じなのに、みわちゃん！携帯ガー！とか言い出すタイタンは酷い奴。誰だよみわちゃん。この前フランスとか言う彼女が何か知らないけど、そんな事を言い出す状況じゃないでしょ全く、という感じで、私がチャカで、大男がナイトウだということを説明した。

タイタンの顔が、何言ってるんだこいつ、頭おかしいんじゃないかこいつ等、という表情をありありとしていたので、吐瀉物ゲロまみが飛び跳ねたロープに不快感を覚えながら必死で説明していた私は、苛立ちが隠せなかった。きちゃない。でも、我慢するしかない。でも不快なものは不快で仕方が無い。その時、第三者の声が割り込んだ。

「取り込み中済まないが、少々宜しいか？」

威圧的な雰囲気を放つ、支配者がそこに居た。

「どちら様でしょうか？」

冷えた声でタイタンが立ち上がりながら答える。基本的に「うはw w w おk w w w」で会話が成り立たないナイトウや、会話事態を避ける節があるヤミカゼ。うちのギルドはどうしてこう、イロモノ揃いなんだろうか。この手の交渉事があると、今は亡きマスター以外で狩り出されたのはタイタンか私のどちらかだった。タイタンが休止中の間は私が全部行っていたけれども。

「失礼。自分はベルウッドと申します。」

「どうもご丁寧に。俺はタイタン。」

名前を聞いて、タイタンの声が更に硬化する。ゲーム内でも引きこもり気味だった私でも知っている、有名なB O T e r 兼R M T e r 兼、大人数ギルドのマスター、ベルウッド。最も全部根も葉もない噂、という話だが。

「貴方がPTのリーダー、で宜しいか？」

「PTがどうかは判らんが、アンタと話してるのは俺だ。」

更に硬い声。この状況で一体何を言い出すのか。威圧的な空気に飲まれそうで、心臓が早鐘を打つ。子供の身長となった私だと、二人とも物凄い圧迫感だ。

「其方のPTに怪我人等は居ないか？」

「は？」

タイタンの間の抜けた声。苛立ちを増すベルウッド氏の声。

「ああ糞ッ。状況がまだ把握できていないのか！いいから質問に答えろ、「怪我人」はここに居ないか！」

「マスター！人員把握と怪我人治療ほぼ終わりました！」

そこに銀の全身鎧を着込んだ戦士が駆け込んで来て、ベルウッド氏に話しかける。

「総人員97名中、死亡者1人です！他は全員回復薬で何とかなりました！」

「ここに3人、総人員100人。生存者全員を一箇所に集めておけ。話がある。」

「はいっ！」

「後、死人も集合場所に運べ。蘇生させる。」

「ラジャ！」

置いてけぼりな私たちに振り返り、ベルウッド氏が言い残す。

「腰のポーチだ、回復薬POTぐらい持ってきたらどう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699y/>

野郎達の英雄譚

2011年11月17日21時27分発行